

89歳監督の描く華麗なる恋

松本 侑壬子・ジャーナリスト

人間、年をとると枯れると言うけれど、今年99歳の新藤兼人監督の反戦映画『一枚のハガキ』は、反戦への思いを最後に中年の恋に託した実にみずみずしく美しい作品である。本作のアラン・レネ監督はフランスを代表する巨匠だが“まだ”89歳、新藤監督より10歳年下だ。この作品は、軽やかで、ユーモラス、しかも人生の機微に目配りの利いた、実に楽しいラブ・コメディだ。それでいて、年若い映像作家にはないたっぷりとした味わい深さがあふれているのは、やはり年の功というものだろうか。

パリのショッピングセンター。渋い初老の男ジョルジュ（アンドレ・デュソリエ）は、駐車場で財布を拾う。中を調べるとお金は抜き取られていたが、小型飛行機の免許証が入っていた。ゴーグルを頭にのせた美しい中年女性の本人写真。名前はマルグリット、住所も電話番号も書いてある。

ジョルジュの中で何かが弾けた。自宅に持ち帰る途中からなぜかそわそわと浮き立つ心。だが、控えめながらいつも正しい賢夫人スザンヌ（アンヌ・コンシニ）に促され、しぶしぶ警察に届ける。実はジョルジュは昔、飛行機の操縦が夢だったのだ。浮足立ちもするでしょう…。

ジョルジュが妻と子どもたちと夕食をとっていると、マルグリットから電話がかかった。「お

礼を一」「それだけ？」「他に何を？」「会いたい」とか」「必要ないでしょう」と言われてカッとなり「がっかりだ」とガチャリと切る。すぐに反省して、お詫びの手紙を書き、マルグリットの住所を探し当ててポストに入れる。が、すぐにまた後悔し、取り戻そうとするが、ポストには鍵がかかっている、結局諦めるしかない。

マルグリットから返事が来ると、ジョルジュは再び手紙を書くが…。ジョルジュからの手紙や連日の電話攻勢に、「もうこれ以上連絡してこないで」と毅然として断る。するとジョルジュは彼女の車のタイヤを切り裂き、手紙で「話かけたかった」と。まるで、子どもではないか。

マルグリットは歯科医で一人暮らし。広い部屋は機能的で気の利いた、いかにも自由な女の城だ。充足した一人暮らしはいいなあ、しかも趣味と言えば、飛行機操縦ですからね。男でなくても懂れてしまいそう。「財布を拾ってくれた男から脅迫を受けている」とのマルグリットの届け出に、警察がジョルジュを訪ねなだめる。ジョルジュは自分の好意を警察沙汰にされて、深く傷つく。ジョルジュからの電話は止まったが、気の毒なことをしたかも、と今度はマルグリットが夜も眠れなくなって…。

会う前からこんな行き違いばかりの二人が、どうして会い、ジョルジュの夢の飛行や操縦が実現したのか。それに、ジョルジュの妻はどうしたか。マルグリットの女友達も加わって、うふふな知恵ややさしさが光る。ほのぼのとした、いい話一で終わるのかと思えば、あっと驚く華麗なドキドキのラストである。大胆でシュールなセンスのよさ。解説によると、これは原作に忠実な正真正銘の「文芸映画」だというから愉快だ。

『風にそよぐ草』

フランス・イタリア合作映画（104分）／アラン・レネ監督

12月 岩波ホール他全国ロードショー

© F COMME FILM

